

武田勢の  
統略

必ず味方、敗軍に及ばし、再び黒面を振つて、甲州に逃げ歸るべし。我々如きは、敵に總角を見する程にては、多くは生きて、本國には歸るまじ。さあらば、軍の手分をせよとて、先づ馬場美濃守、一條右衛門大夫・眞田源太左衛門・同舍弟兵部丞・土屋右衛門尉の五手は、大宮前佐久間右衛門尉・羽柴筑前守・明智十兵衛尉が手前へ押懸り、一戰を挑むべし。内藤修理・武田道達・軒原隼人佐和・田左衛門尉・五木刑部少輔・兩人一手、永根雅樂助・松本兵部兩人一手、安中左近進此五手は、瀧川左近將監・蒲生忠三郎・丹羽勘介等に押懸り、柳田の前を働くべしとなり。山縣三郎兵衛は、武田左馬助・小幡新龍齋・同左衛門佐・甘利三郎四郎・小笠原掃部大夫・松岡參河守・小山田兵衛尉・跡部大炊助、各二手を一手にして、都合五手、是は正樂寺前大久保兄弟・松平周防守が手先へ、押向ふべしとなり。扱、勝頼の御旗本、前は望月甚八郎、後は武田左衛門佐を一組にして、竹廣の奥、徳川家の旗本に懸らるべしとの定めなり。勝頼仰せけるは、徳川勢をだに切崩さば、信長は、何十萬騎にても、物の數ならずとぞ宣ひける。

### 長篠合戦 附 高坂彈正昌信眞忠の事

長篠合戦

斯くて、天正三年五月廿一日、黎明より織田・徳川の軍勢、都合十二萬八千餘人を、百八十手に分ち、各組合せて、廿三段にぞ備を立てたりける。天に翻る旌旗は、武藏野の尾花が末に等しく、打出す鐵炮の音は、百千の雷、一度に落懸つて、天地是が爲めに鳴動し、坤軸須臾に碎けぬべくぞ覺えける。然るに、武田の軍勢、僅に一萬千餘人を四手に分ち、先づ馬場美濃守、手勢七百餘人を以て、關防山の麓を押出し、大宮前佐久間右衛門尉が五千餘人を以て、柵の外へ張出し、旗本を小さき塚の上に押上げ、己が吹貫の馬印を、山風に吹靡かせ、凜々然として備へたるに、美濃守、七百餘人を以て、二つに分け、三百五十人を以て、眞一文字に押懸り、山道段々の旗を、左右に進ませ、采配を采つて、唯合戦の勝敗にかゝはらず、鎗を入れて突崩せ。生きて押付を見られんより、骸を長篠の苔に埋むべしと、乗廻し、日頃、一人當千と頼みし同心被官の勇名を呼んで、士卒を進むれば、須臾に、佐久間が五千

長篠合戦 附 高坂彈正昌信眞忠の事



餘人を、臺より下に眞繰下し、先づ敵兵、四十三人討取りたり。美濃守、則ち臺に馬を乗上げ、山道の旗を押立て、戦勞れたる三百五十人を、塚の後に繰替へ、荒手三百五十人を以て、臺の前に備へたり。瀧川左近將監も、四千餘人にて、佐久間が馬手、柳田に備へたるを、中央の二の手内藤條理、千五百人にて押懸り、竟に瀧川一益を追崩し、柵の内に追入れ、三十四人討取りたり。此處、左右田切にて、人數の進退自由ならざれば、昌豊、武略を以て、先づ軍勢を引揚ぐる。徳川家は、斯くあるべしと、兼ねて賢察まし、ければ、佐久間が備に、小栗大六郎、淺井六之介、麻生次郎、左衛門、瀧川備には、柴山五作、淺井雁兵衛、香村善七郎を以て、仰せ遣されけるは、各、兩人の備、柵の外へ張出さるゝにより、敵、小勢なれども、猶更合戦は、嚴しく致すべく候へば、手負死人大勢に及ばん事、家康本意にあらず。早く柵の内へ引入れ、備を立てられ候へと、仰遣されけるに、其時、佐久間怒つて、戦はずして崩るゝを、殊に信玄家に於て、見崩と稱して、大に笑ふと承る。其方の黨の如く、逃入はすまじと、惡口しけるに依り、徳川家、則ち自身御馬を出され、信長の本陣川上山へ鞭

家康の先見

山縣昌景の奮戦

を揚げて駈けられ、信長に仰せけるは、御家人佐久間盛政、瀧川一益、柵の外へ張出し、武田の魁將馬場内藤と戦はんとす。多くは、敵、付入にせん事必定なり。さあるに於ては、柵の木を、結はれたる甲斐あるまじく候と、仰せければ、信長、此儀尤も至極せりと、同心おはしまし、則ち不破彦三、山岡美作守を呼び、佐久間、瀧川が備に、軍使を立てらるゝに、兩使、川を打渡し、八劍の弓手の方へ打上りけるに、早や、佐久間は敗軍に及んで、柵の内へ逃入りければ、軍使は夫より取つて返し、信長の嚴命を逃ぶる能はず、川上山へぞ馳せ歸りける。爰に、徳川家の勇臣大久保七郎右衛門、同次右衛門、六千人を引牽し、柵を一町計り離れ、竹廣の前に押出し、山縣三郎兵衛尉が千五百人と打合せ、兩方、一足も引かじと攻め戦ふに、昌景、千五百人を鋒矢に作り、六千餘人の真中を、後へつと鍛破りけるに、敵味方、場を入違へ、參州勢は、正樂寺の方へと、靡き散るを得たり賢しと、昌景、人數を二つに乘切り、參州勢を、柵に入れじと捫立てけるに、山縣が破竹の勢に、大久保勢、四度路になり、漸くして柵の内に引退く。昌景、透かさず付入にせよと伺り、真先に駈出す。山縣が勇

長篠合戦附高坂彌正昌信眞忠の事



辛廣瀬郷左衛門・三科傳右衛門・小菅五郎兵衛・赤白纒張の指物にて、棚の内に突入れば、大久保七郎右衛門、揚羽の蝶の指物、舍弟次右衛門、金の釣鏡の指物にて、三人と鎧を合せ、士卒を勵まし、棚の外へ追出せば、又咬付いては突入り、追つゝ眞繰つゝ攻め戦ふに、既に九度の駆合なれば、三科・小菅も、痛手を蒙り引退く。されども、廣瀬は猶ほ敵中に駆入り、能き武者七騎を突伏せ、十三騎に手を負せ相働く。其間に、山縣又四度迄、敵と突合ひしかば、以上十三度の戦に、鐵炮に中り死する者六百餘人、山縣、僅か八百計りに討なさるれども、猶ほも虎口を少しも去らず、一時に進んで、棚を引破れと下知しけるに、八百餘人の銳卒、一度に棚を押破り、死狂に働けば、又二百餘人討たれ、疵を蒙る者三百餘人、されども手負も、三箇所負はねば引退かず。昌景も、參の吹返射向の懸袖、鐵炮にて打碎かれ、其外、胸板弦走の邊、都て鐵炮疵十七箇所、されども厚鐵の様なれば、少しも裏はかゝざりけり。其時、昌景が勇士志村又右衛門、山縣が馬の永付を取つて、既に千五百人の軍勢、千人、鐵炮に中り、殘黨五百人、二百人は痛手を蒙り、三百人殘つて、棚の内にて切死と働き候。今

は軍勢を引揚げられ、二の新に譲り、士卒の咽をも潤させて、再び戦はるべくやと申しける。山縣、實にもとや思ひけん、棚の内に馬を乗入れ、自ら敵を押へ、軍勢を引揚ぐる。敵兵朱の角切・折敷の前立を見て、音に聞えし山縣なるぞと、鎧を揃へ懸り來るを、廣瀬郷左衛門・辻彌兵衛・志村又右衛門、敵を押へ引退くに、山縣鞍笠に乗り懸り、軍勢を左右に引取らせ、敵を白眼んで、馬にしざり口を引く所を、敵兵、近く覗寄つて、武器の透間を打つ。鐵炮にて、鞍の前輪より拂手下を、後へ打貫かれ、少しも堪らず、逆様に落つるを、敵兵走り寄り、山縣が首を搔落し、提げて退くに、破れたる棚に行懸り、少し猶豫ふ所を、志村又右衛門追懸け、其敵を突伏せ、山縣が印を取返す。斯かりければ、昌景が備も、右往左往になりて引退くに、大久保兄弟、大音を揚げ、又棚の外へ突出づる。之を見て、徳川家の御旗本も、備を進めらるゝ旗色なれば、武田左馬助、一手を別手にして、八劍の御旗本を押さるとて、早雄の甲州勢、直に懸り戦を始むるに、小山田兵衛尉も押出し、三度迄操合ひける。其外、跡部大炊助・小幡左衛門・望月甚八郎・甘利三郎四郎、各、一手に備を合せて、以上二度驅



合ひけるに、都合竹廣に於て、十八度の合戦、敵は大久保兄弟、唯兩人、六千餘人を従へ、備毎に馳行き、鐵炮の節を制し、勝負の沙を下知し、士卒の進退をなさしめければ、寔に離倫の舉動なりと、勝頼も遂に御覽じ、大に感じまし／＼ける。されども敵は、柵木に引入れては息をつぎ、唯遠矢に、甲州勢を打倒す計りにて、鎗付押込んで、敵を討取る事、一人もなかりけり。味方は敵に渡合ひ、或は鎗付け、或は引組んで首を取る。さるに依つて、討たる、者は多く、敵を討つ事、更に無かりけり。爰に、勝頼の御前望月甚八も、敵を追込み、山縣が討死の場に、馬を乗出し、人數を揚げんとせし所に、餘りに、鐵炮厳しく、一度に九つ迄玉來つて、甚八郎が鎧にあたる。其中、脚と内鑿を打たせて、終に討死す。又、柳田前は、内藤修理原隼人佐安中左近武田道遠軒和田五郎永根松本、以上六度の戦、されども、信長勢弱く、柵の外へ出でず、唯鐵炮を以て、打撃む計りなり。さるに依つて、内藤大音揚げ、上方勢の軍は、鐵炮なくんば、合戦をする事あるべからず。惡し、柵を離れて、武田勢の鋒先を、受けて見ぬかと呼ばはりけるに、瀧川一益、羽柴秀吉、七千計りにて、

柵の外へ押出すを、内藤原、生残つたる軍勢、千七百人を以て一戦に打散らし、一の柵を押破れば、秀吉一益、大に敗軍して、二の柵を指して逃入りたり。此時、瀧川が金の三圍子の馬印、餘りに敗軍して、横に打倒れけるに、甲州の軍勢、之を取らんとしけるを、漸くして畔を撃り、泥田を渡つて、三の柵に逃入りたるは、見苦しかりし事共なり。此時、内藤原、安中三人、馬を乗離し、自身各、二の柵を引破りけるに、三人共に鐵炮に中り、枕を並べて討死せり。内藤が首は、徳川家の朝比奈彌太郎討取つて、采配を添へて引退く。斯く柳田前竹廣前は、徳川家の勇士、花々しく打出て戦ふに、右の手先大宮前、佐久間右衛門、河尻肥前守等は、馬場美濃守に追崩され、柵より外へ出てざるに依り、直に押懸け、一の柵を引破り、又、敵を突崩すに、此時、森武藏守明智十兵衛、不破河内守床山五兵衛等、佐久間を助けて、一萬餘人大波を立て、押懸るを、馬場信房、六百餘人を左右に立て、眞先に進み敵中に突入り、二の柵に於て、敵に當る事、既に十三度なれば、皆鐵炮にあたり討死し、僅か二百餘人になりける。されども、馬場は少しも騒がず、二の柵に馬を乗入れ、二百餘人を下知



して、悉く柵を取拂ふに、敵兵、敢て出合はず。唯、鐵炮を以て、打撃めけるに、二の柵に於て討たる者、又百餘人、馬場が八百人の軍勢、此時に至つて、唯八十人に討ちなされけれども、美濃守、少しも虎口を緩けず。其時、眞田源太左衛門、同兵部承、土屋右衛門、馬場が跡へ馬を懸懸け、軍勢を押出し、是非に引取られよと、追々に軍使を立つるにより、八十人を前後に立て、朱になつて引退く。眞田兵部、眞先に進んで、手勢を下知し、又、二の柵を破らんとするに、明智光秀が備より、究竟の士卒六七人、兵部を目懸け馳寄する。眞田、莞爾と笑ひ、滋井の末葉海野小太郎幸氏が後棘、眞田一德齋が二男兵部承昌綱、討つて高名にせよといふ儘に、眞先に進む武者三騎、左右に突伏せ、鐵炮に中つて終に討死す。舍兄源太左衛門、二度敵を眞縁付けて、二の柵を破り、舍弟と同所に討死す。土屋右衛門尉も、三度敵を追崩し、池田紀伊守蒲生忠三郎が備を、横合より突崩し、少し引下つて、一條右衛門太夫信龍に向ひ、某候、先月、信玄公御法事の節、殉死を遂げんと欲する所に、高坂昌信に諫められ、今日迄存命、本意なく存ずる所なり。則ち唯今討死と斷り、三の柵際に至

眞田兵部  
兄弟討死土屋信近  
討死

り、敵を招き、土屋右衛門尉信近討つて、高名にせよと、呼ばはりけれども、敵來らず。其時、土屋が士卒金九十助槍井作兵衛なんといふ者五六人、左右にて鐵炮に打倒さる。土屋が整の天邊にも、鐵炮五つ迄、中ると雖も、敢て裏かへず。其後、猶ほ敵中に進んで、竟に三十一歳にて討死す。一條右衛門大夫も、二度迄敵を追崩さる。此時、又、馬場信房、軍勢を休め八十人を前後に立て、三の柵際に至り、前田又左衛門、野々村三十郎等が鐵炮の備を追散らす、此時、都合九度の騒合に、味方悉く討死す。然れども、馬場は未だ手疵をも蒙らず。同心被官に向つていひけるは、今朝卯の刻に打出てし時は、手勢八百餘人なりしかども、今、午の刻に及んで、三時の迫合に、僅か七十餘人に討なさる。迄、汝等、信房を見届くる事神妙なり。山縣内藤、眞田土屋を始め、各討死したる由、汝等は、早く引退くべし。我は、御旗本を守護し、引退かんと雖も、一人も落失せず。然る所に、一條右衛門大夫、馬場と一所に馬を立てられ、諸手の大將衆、残らず討死と見えて、備亂れ候。此上は、怖へても詮なき事なり。御旗本も引退かれ、然るべく候はんかと申されける。信房、其時申し



けるは、多分勝頼公も、討死なさるべきかと存するにより、我れ未だ存命へ候。御討死なくば、旗本の退き給ふを見て、退き候はんといふ。然るに、穴山梅雪は、徳川家に内通あるにより、終に手に合はず、岡坊山に引退く。扱又本軍と一度に鷲巢にも、合戦始り、武田兵庫介三枝勘解由左衛門を始め、各討死し、辰より未に至つて、已上四度の迫合なり。此時、一條信龍の同心和田刑部、馬場に向つて、御旗本の合戦殿しく見え候。散卒を集められ、勝頼公を退け奉られ候へかしと申す。信房、其時、斯かる後口には、下知も用ひぬものなれば、唯忠義には、一人なりとも命を繼いで、重ねての御用に立つべし。汝も早く引取れといふ所に、御旗本に、徳川家の脇備本多平八郎・榊原小平太本多作左衛門以下突懸る。勝頼、少しも騒ぎ給はず、眞先に進み給ふを、土屋惣藏、御馬の轡を引駐め奉れば、御旗本の退兵四百餘騎、蹈留まつて一足も去らず討死し、勝頼を退け奉る。大文字の御據旗、敵に左文字を見せて、一條殿も退る。馬場美濃守は、屋形に二町計り引下り、敵兵の募ふを待請け、勝頼の御無事を見届け、長篠の橋場にて取つて返し、高き所に馬を乗上げ、是は六

勝頼退陣

馬場信房  
討死

孫王經基の嫡孫攝津守頼光より四代の孫、源三位頼政の後、棘馬場美濃守信房といふ者なり。討つて高名にせよと、如何にも尋常に斷りけるに、其時、敵兵十騎計り、四方より鎗付くるに、終に刀に手をも懸けず、六十二歳にて討死す。是は昨二十日の夜、長坂釣閑跡部大炊助に向つて、合戦を進め奉る各、は生きて甲州に歸るとも、留め申す我々は、大方討死をすべしと、申したる言葉故なり。扱又、屋形に始終付添ひ奉るは、初鹿傳右衛門三十二歳、土屋惣藏二十歳、是は金丸筑前守が五男にて、土屋右衛門尉が弟なり。容顔美好にして、心剛なりければ、勝頼の御寵愛雙ひ無し。然るに、兄右衛門尉を、心元なく思ひければ、兩度迄、馬を引返すに、勝頼も、俱に轡を返されける。爰に、武田左馬助信豐は、馬上歩者三四十人にて、屋形の跡より退かれけるが、勝頼、初鹿に宣ふは、左馬助が、纒を指さるは不審なり。我れ信玄の御時、御先を駆けたるにより、當家重代の母衣に、四郎勝頼と名を記して指したり。今は我れ、屋形の眞似をするにより、左馬助に譲れり。若し其母衣捨てて、織田・徳川の兩家に渡り、勝頼が退口に、指物を落したりなどといはれては、

長篠合戦附高坂陣正信信玄忠の事



末代の暇隙なり。身命は捨つるとも、之を捨て、は引くまじと、仰せらるれば、初鹿、跡へ乗下り、信豊に斯くと申す。左馬助聞き給ひ、餘りに闇はしかりつる上より、串をば捨て、母衣は、家老の青木尾張守に、持たせ置きたりとて、尾張が首に巻いて居たりしを、傳右衛門、取つて屋形へ差上げ、斯くと申す。勝頼、取らせられ、上帯に插み給ひ、引返さる。此時、初鹿、四五町往返する間、勝頼、馬を一所に立て給ひけるに、流石の逸物、大に勞れ、一足も進まず。初鹿、聲をかけて追ひけれども、少しも動かず。是は口惜しと宣ふ所に、笠井肥後守、何處よりか此體を見たりけん、諸鎧を合せて馳せ來り、急ぎ馬より飛下り、某が馬に、召さるべしと申す。勝頼仰せけるは、汝、馬に離れたらば、討死をすべしと仰す。肥後守、其時、功爲恩命依義輕。忤を御取立て下さるべしといひて、勝頼の御馬の手綱を取つて押戴き、ゆらりと打乗り、二町計り引返し、終に討死をしたりけり。之を甲州家に於て、其頃の大剛の武士と譽めけるなり。此時、遠州勢十二三騎、勝頼の御後を慕ひ、逸散に乗寄する。初鹿傳右衛門、土屋惣藏、心得たりと取つて返し、眞先に進む勇士を、

傳右衛門渡し合せて、逆様に切つて落す。惣藏も一騎切落して、二騎、轡を雙べて引返すに、勝頼も同じく御馬を返さる。五月廿一日の焰天なりければ、諏訪法性の御鑓を、初鹿に持たせ置かれけるが、初鹿、敵を討つて跡へ急に進むとて、御鑓を深田の中へ取落しけるが、目前に敵を見たれば、御鑓を取揚ぐるに及ばず。猶ほ敵中に懸入り切結ぶに、惣藏は、能き敵と組んで落重り、則ち首を取る所に、小山田掃部、弟彌介、寺島甫庵三騎、靜かに退きけるが、此所に退懸り、天の與と悦び、前後より引包んで、各、一騎宛に討取り、三騎に手負はせければ、殘黨悉く逃げ散りける。勝頼、此體を御覽あり、大に感じ給ひ、殊に惣藏が組打の高名、御秘藏の者なりと仰せられ、扇にて煽ぎ立てられけるこそ有難けれ。初鹿は、綿嚙の逃に血を引きければ、勝頼自ら御藥を付け下されけり。然るに、小山田彌介は、首を提げて、彼御鑓に行き懸り、則ち捧げて御前に持ち來る。其時、初鹿申しけるは、其御鑓、某持つて退きける所に、唯今の敵、頻に咬付きしかば、勝負の邪魔なるにより、御敵とは代へ難く、御鑓を捨て、斯くの如しといへば、勝頼を初め、各、初鹿が剛なる心を感じける。



扱又、長篠の押の内、諸我入道一葉軒は、鞭を揚げて、猿橋の阿方にて、藤頼に追付ら奉り、長篠の城を、卷解し申すべくやと伺ふ。勝頼仰せけるは、急ぎ歸つて、人數を揚ぐべしと宣ふ。されども、諸我、屋形の御退口を、心元なく思ひければ、猿橋を、横山の方へ打越し給ふを見て、取つて返し、長篠に至り軍勢を引揚ぐる。奥平九八郎、大手の軍、勝利なる事を察しければ、軍卒を従へ、城戸を開き咬留むる。高坂源五郎昌澄、彈正の嫡男、後殿なれば取つて返し、嚴しく戦ひ、九八郎を城内に追込み、痛手三箇所蒙り、終に討死す。首は揚げて甲州にぞ歸りける。又、河國西郡の松平主殿助、岩城の瀬を越えて、小山田備中守に付慕ふ。小山田、大返に返し、主殿助を始め、一人も残らず討取り、心靜に引入る。是より敵、一人も慕はざれば、屋形も靜に引入れ給ひける。總て此合戦は、猥りに批判仕り難き合戦なり。其謂れは、十三萬の敵、然も要害に據つて、棚を振り堀を掘りたるに、味方一萬千餘人を以て、敵箭の的になりて押懸り、三重の棚木、二重迄押破り、卯の下刻より未の中刻に至つて、五時の間、以上駈合五十八度、場を隔つる事五箇所、信長の手先の何十萬もあれ。

高坂昌澄  
討死合戦に就  
いての批  
判

馬場内藤に追崩され、再び棚の外へ出でず、唯鐵炮を以て、打撃めたる計りなり。

徳川家の御先大久保忠世、同忠佐兩人、竹廣に於て十八度の追合、是も棚に據るとは雖も、前代未聞の働なり。其五箇所の場合といふは、竹廣前一箇所、山縣勢を以て相戦ふ。柳田前一箇所、内藤勢を以て切崩す。大宮前一箇所、馬場勢を以て切崩す。

五箇所の  
激戦

又長篠の押の地に、一箇所、嵩巢山に一箇所、都合五箇所、武田の士大將、各、敵を追崩して、敵の爲めに追崩されず。馬場が如きは、八百の軍勢、八十に討ちなさるゝ迄、二の新に渡さず。内藤、山縣、猶ほ斯くの如し。されども敵兵、味方に百倍すれば、竟に戦死して、名を後代に残しけり。然るを、織田家に於ては、此戦を以て、大に面目に備へしとかや。然る上は、負けても、させる恥辱に非ず。勝つてもさせる譽に非ざるをや。其上味方、此合戦に於て、討勝つべき謂れ、一つも無し。第一、衆寡同じからず。第二、人の和無し。第三、敵の爲め地の利要にして、味方の爲めに地形害あり。第四、天の時に違へり。天の時は、第一、孤虚、午の方にて、孤は敵方にあり。第二、旺相も夏にて、王は南にあれば、敵、南に備へて北に向ふ。第三、破軍

武田敗軍  
の理由



も辰巳午の三時は、良に向へば敵にあり。斯くの如く、味方に吉事、一つも無きものをや。天の時地の利人の和に背きて、何を以てか戦に勝たん。寔に察せずんばあるべからざるなり。爰に、高坂彈正昌信は、謙信の押として、一萬餘人を以て、海津の城にありけるが、兼ねてより斯くあるべしと思ひければ、軍勢八千人を従へ、小馬場迄、御迎として來り、勝頼に拜謁し奉る。屋形仰せけるは、老臣等が諫を容れず、勝利を失ふのみならず、古老の面々、各討死をしたること、勝頼が武運も、是までと思ふなりと、涙を浮べ給ひ、且つ嫡子源五郎討死のこと、猶更、難儀に思召すよし仰せければ、其時、高坂霜臺、裕如として少しも憂へず。是れ御若氣の致す所なれば、唯兩人の面々にこそ、罪は候べけれ。一萬の味方を以て、十三萬の敵に、一日五十八度の合戦、吾が朝千萬年の後に傳へて、誰か君を以て、弱將なりとは申すべきかといへば、勝頼、此時、快然としてましくけり。斯くて御供を飾らせ、甲州に歸陣し給ひけり。其後、高坂、其儘甲府にあつて、五箇條を以て、勝頼を諫めける。

勝頼甲州に歸陣

一、駿河遠江、氏政へ進ぜられ、北條の幕下にならせられ、御先をなされ、勝頼公は、甲斐信濃、上野三箇國御支配と、仰入れられ御尤の事。

一、其上にて、氏康の御娘子を迎へ取られ、氏政の御妹婿に、御なり御尤の事。

一、木曾を、上野小幡へ御越し、小畑上總守を、信州木曾へ御越し御尤の事。

一、唯今迄の足輕大將を、人數持になされ、馬場内藤山縣が子供を始め、皆同心被官を召上げられ、奥近習になされ、小身にて召仕はるべく候。明日某、果て候とも、悴を小身になされ、同心被官老功の者に御預け、御尤に存する事。

一、典厩穴山に、腹を切らせらるべく候。穴山を典厩に仰付けられ、典厩をば、我等に仰付けらるべき事。

右五箇條、土屋惣藏を以て、申しけれども、耽々御合點なく、其内、氏政の御妹婿に御なり候と、眞田源太左衛門跡目に、弟喜兵衛を仕居ゑらるゝ事計りに、點を懸け給ふ。さるに依つて、武藤喜兵衛、是より眞田安房守と號し、士大將にぞなされける。



らず。徳川家は、度々戦場に於て見参しぬれども、終に信長父子に、予が鋒先を見せず、數萬の後詰、來りたるを見て、勝頼、軍勢を擧げて逃げたりなどと、後代の楮上にも殘らんことを口惜く、合戦を始めたなり。互に相嗜み、對々の人數を以て、棚の木を結ばず、切所に據らず、尋常に勝負を致さば、假令百度戰ふとも、信長の武略を以て、勝頼が鋒先には及ぶべからず。然りと雖も、信長は果報にして、天下の權門なれば、數國を押領し、軍勢を多く從へらるゝにより、我も竟には攻め滅さるべし。さすれば、今度の書札も、暫時の急難を遁れんと、欲せらるゝ調儀なれば、我れ何ぞ之を許容せん。使僧、速に安土に歸り、此旨を以て、信長に演舌すべしと仰せければ、勝仙院は御前を立ちて、江州にこそ歸りけれ。

### 甲陽の府館妖嬖勝頼、景勝を助けらる

#### 井高坂彈正死去の事

明くれば、天正六戊寅年正月元旦の賀儀、甲州の御館に於て、四郎勝頼、之を受け

給ひ、長生の祝言をぞ執行はれける。然るに、其頃怪げなる事共多かりしに、皆是、御屋形滅亡の物怪なりと申しければ、甲府の御館にある女童は、朝暮魂を空にして、胸意を冷さずといふことなし。中にも同じき正月十五日、勝頼の調臺の右の方に當つて、御庭の隅に、大なる杉の木、茂りありけるが、其本にて、馬の高く嘶ふ聲、二三次度したりけり。勝頼、不思議に思召し御覽あるに、馬の生首二つ、血に染み喰締んでぞ居たりける。則ち御調度懸にありける弓を取り給ひ、山鳥の征矢をつがひ給ふ處に、土屋惣藏、廣縁に立出て、之を見付け大に怪み、先づ御弓を納め給ふべしと制し、走り寄りけるに、其儘消えて失せたりけるこそ怪しけれ。勝頼は、射留めぬことの無念さよとぞ仰せける。爰に上杉入道謙信は、去年九月、使者を以て、信長へ申されける旨あるにより、當正月より越後、佐渡、飛騨、越中能登、加賀、東上野、八箇國の分國に陣觸して、三月十五日、春日山を進發あり。越前に於て、信長を伐崩し、天下を掌握せんと宣ひ、用意甚だ嚴重なれば、上杉幕下の諸士、勇み進まずといふことなし。斯くて謙信は、兼ねて北條氏政の令弟を、養子にせられ、上杉三郎



景虎と名付け、又甥の喜平治をも養ひて、景勝とを名乗らせられる。然るに、謙信、進發の用意調り、首途あらんとする三月九日、雪隠より難病に犯され、醫藥術盡きて、同じき十三日、四十九歳にて逝去あり。然るに、其翌十四日、景勝、本丸に楯籠り、謙信の御影を懸け、直江山城守已下を召集め、景虎退治の評議せらる。三郎景虎、之を聞きて、同じく一の曲輪に楯籠りければ、本丸より鐵炮を強く打懸くるにより、景虎堪らず、越後國府中に引退く。然るに、北條丹後守、之を聞いて安からず思ひければ、戸定城を打立ち、春日山に至り、景勝に申しけるは、謙信公逝去、一月も過ぎざるに、利慾の爲めに、兵を動かさるゝこと、尾籠の至なり。分國八箇國の内、越後越前上野佐渡を、景虎へ渡され、景勝へは、能登加賀越中飛騨四箇國を支配あり、兄弟の間に、弓箭を止め給ふべし。さあるに於ては、兄弟合體あり、越前に打出てられ、信長に楯がはれ、亡君の志をも續き給ひてこそ、謙信の御家督とも、申すべけれど、諫めけれども、景勝、聊も此事を用ひられざるにより、北條大に怒り、景勝を捨て、景虎を助け、其勢八千餘人を従へ、越後國善光寺に陣を取り、

日々足輕を出しければ、春日山よりも、安田上總介等、足輕を駆け追合せけるに、景勝生年廿四歳、然も弓箭に賢々しく、夜陰に紛れて軍勢を出し、善光寺の後、鐵捕へ廻り、一度に関を作りかけ、喚き叫んで突入りければ、流石の北條、不意を討たれ、前後を忘じ敗走して、景虎の居城府中を指して、引退くを、景勝の軍勢、遁すなど追蒐け、大勢を討取りたり。中にも北條には、景勝の勇士萩田主馬鎗付けけるが、切拂ひ引退き、竟に翌日死したりけり。さるに依つて、三郎景虎、相州小田原に加勢を乞はれければ、氏政驚き、急ぎ甲州に使者を以て、申されけるは、頃日、上杉謙信死去致され、景勝、景虎を追出し候に付、死去は今月十三日なるに、其翌十四日より、兄弟、春日山城中にて勝負を仕るに、景虎打負け、同國府中に退き候へば、北條丹後守、景虎を助け、日々に追合を遂ぐるの處に、同じき二十日の夜、景勝不意に出て、丹後守討死、是非に及ばず。既に景虎切腹仕るべきの處に、氏政が援兵を頼み、今に持ち来候。何卒勝頼、御馬を出され、景勝が暴惡を退けられ、上杉管領の名跡を、三郎景虎に與へ下され候はゞ、生前死後の面目、亡父氏康、泉下に在りて本懐

甲陽の府館松崎兩縣頼景勝を助けらる井高坂源正死去の事



勝頼退後  
に出陣

に存すべし。御出陣に於ては、江戸の遠山に、北條治部大輔富永中條、常岡等に、太田大膳を差副へ、一萬五千人を差遣し候べしと、殷勤に申越されしかば、勝頼、氏政の妹婿といひ、我が力に及ばぬ強敵を、勝頼に頼まるゝ段、面目なりとて、早々出馬ありけるに、相従ふ輩には、高坂源五郎彈正三男、嫡子長孫にて討死、馬場民部少輔美濃守なり、原隼人佐、故隼人昌勝は、長孫にて、跡部大炊之助、土屋惣藏、長坂釣閑、其兵合せて七千餘人、北條の軍兵一萬五千人、都合二千人を従へられ、頃は天正六年三月廿五日、甲府を進發あり。越後國飯山に押付け、陣を取られけるに、景勝、此ことを聞きて、安からず思はれければ、直江山城守、須田大炊之助、杉原常陸之介、安田上總之介等を引具し、其勢二萬三千人、春日山を押出し、合戦を以て懸けられけるを、甲州の魁帥、各、若手の中、高坂源五郎、馬場民部少輔五千餘人を以て、越後の備五段迄切崩せば、叶はずして引退く。斯くて、間兩日あひだを置き、又景勝、旗本を以て先を懸けられ、上杉家傳の龍の丸備を以て、押駆けらる。甲州家は、土屋惣藏、原隼人佐、四千人を以て丸備に作り、飯田山を押下し、景勝の六千餘人と渡り合ひ、火花を散し戦ふに、

土屋惣藏、四備を以て左右より挾撃てば、景勝の軍、四度路になり、色めき立つを、直江山城守が計らひにて、兎角降参あつて然るべし。さあるに於ては、上野を勝頼に差上げられ、御妹君を乞請け給ひ、御禮を申上げられ、然るべく候はんと申すにより、然らば、其儀を計らへとて、勝頼の本陣へ、使者を越され、景勝術を失ひ、今、勝頼の軍門に降らんことを請ふ。然る上は、東上野を以て、勝頼に捧げ申すべし。冀くは、信玄公の御息女を、景勝が室家に給はり候へかし。さ候はゞ、御幕下にしんが属ひ、御先を仕り候べしと、申し越されけるに、長坂釣閑、跡部大炊之助等申しけるは、景勝は、北越に勇威を振はれ、既に八箇國の主將たり。君、一旦の御武略を以て、管領の家嫡を、幕下に従へらるゝこと、是非の意見に及ぶべからず。此上は、二十餘箇國



の武將信長をも、足下に見なし給ふなれば、追付本意をも、遂げ給ふべしと申せば、勝頼、則ち許諾あり。菊御料人を、遣さるべしと返事ありければ、景勝、喜悅淺からず。然らば、御禮を申すべしとて、盡未來、心を變ずまじき由の誓紙を捧げられ、東上野を進上の上に、御縁者に罷成り候印として、越後布三千端、黄金一萬兩、勝頼に進上あり、御禮を申されける。扱又、今度の儀、兩人執持の故なりとて、長坂、跡部兩人が方へ、黄金二千兩宛、景勝より下されければ、兩人大に悦び、冥加なる由を御禮申しけり。釣閑申しけるは、去る元龜三年、信玄公、天下に旗を進めらるべしとて、分國中の金子を集め給ふに、後家役出家の妻帯役迄、取集められて、漸々八千三百兩集りぬる由、市川宮内、跡部美作守、言上致され候。今させることも無きに、既に黄金一萬四千兩、御手に入るは、前代未聞の次第なりとぞ申しける。斯くて、北條の士大將共、勝頼は、利慾に迷ひ給ひ義を捨て、的然たる小舅三郎景虎を見放し、景勝に一味せられ、口惜しき次第なれば、今は我々一萬五千人を以て、勝頼に合戦せんと評議しけるに、勝頼又、景虎の方人本庄清七郎、北城安藝守と、兩度戦ひ給ふに、勝頼、

景虎自盡

長坂跡部の邪惡

兩度ながら戰勝たれけり。景虎、今は奈何ともすべきやうなく、則ち腹を切り給へば、北條の士大將共は、面目を失ひ、小田原にこそ歸りけれ。さるに依つて、勝頼も三月下旬、甲州に馬を入れ給ふ。然るに近年、長坂、跡部の兩人、邪惡を恣にし課役を懸け、收納の外を押掠め、賄賂に耽ると諸人申しければ、今度上杉景勝、御禮の黄金、偏に彼の兩人が才覺を以て、勝頼に徳を付け參らせ、己々も多く金子を賄賂に取り、和睦を計りけりと、諸人大に嘲り、勝頼の凱陣ある道の側に、一首の狂歌を立てたり、

無常やな國を寂滅することは越後の鐘のひびきなりけり

然るに、同年三月、高坂彈正昌信、病を煩ひけすに、病體少しも信玄公の容體に替らず、次第に事甲斐なくなりければ、勝頼を始め、一門譜代の面々集り給ひ、醫療様々に、手を盡されけるこそは有難けれ。されども、終に死したりけるこそ、武田の家の不祥なれ。則ち二男高坂源五郎に、九千貫の領地と共に、同心被官四百五十騎を預け下されければ、所領士卒ともに、源五郎、辭退申すこと頻なり。

甲陽の府館妖毒附勝頼景勝を助けらる并高坂彈正死去の事



## 上州治亂記 卷之六

## 高坂彈正昌信眞忠

爰に高坂彈正昌信は、謙信の押へとして、一萬餘人を以て、海津の城にありけるが、兼てより、斯くあるべしと思ひければ、軍勢八千餘人を従へ、小馬場迄、御迎として來り、勝頼に拜謁し奉る。屋形仰せけるは、老臣等の諫を容れず、勝利を失ふのみならず。古老の面々、各討死を遂げたる事、勝頼が武運も、是迄と思ふなんと、涙を浮べ給ひ、且つ其方嫡子源五郎討死の事、猶更難儀に思召す由仰せければ、其時高坂彈正霜臺、豁如として、少しも憂へず。是れ君御若氣の致す所なれば、唯兩人の面々こそ、罪は候べし。一萬の味方を以て、十三萬の敵に、一日五十八度の合戦、吾朝千萬年の後に傳へて、誰か君を以て、弱將なりと申すべきといへば、勝頼、此も快然と

高坂昌信  
勝頼を諫  
む

してまし／＼ける。斯くて後、高坂御供を飾らせ、甲州へ歸陣し給ひける。其後高坂甲府にあつて、五箇條を以て勝頼を諫め奉る。

一、駿河遠江氏政へ被進、北條の幕下に成らせられ、御先を被成、勝頼公は甲斐信濃、上野三箇國御支配と被仰入御尤の事。

二、其上にて、氏康の御娘子を御迎ひ取り、氏政の御妹婿に御成、御尤の事。

三、木曾を上野小幡へ御越、小畑上總守を、信州木曾へ御越、御尤の事。

四、唯今迄の足輕大將を、人數持に被成、馬場内藤、山縣が子供を始め、皆同心被官を被召上、奥近習に被成、小身にて可召仕候。明日某果て候共、忤を小身に被成、同心被官老功の者に御預、御尤に存候事。

一、典厩穴山に、腹を切らせらるべく候。穴山を典厩に被仰付、典厩をば我等に可被仰付事。

右五箇條、土屋惣藏を以て申しけれども、耽々御合點のなき事、是非もなき事共なり。



## 甲陽府館妖孽并高坂彈正死去

明くれば天正六戊寅年正月元日の賀儀、甲州の御館に於て、四郎勝頼是を受け給ひ、長生の祝言をぞ執行はれける。然るに其頃、怪氣なる事共多かりしに、皆是御屋形滅亡の物怪なりとさゝやきけり。扱甲府の御館にある女童は、朝暮魂をそぐろにして、胸を冷さすといふ事なし。中にも正月十五日、勝頼の帳臺の右の方に當つて、御庭の隅に、大きな杉の木茂りあげけるが、其本にて、馬の高いばふ聲二三度したりける。勝頼、不思議に思召し御覽あるに、馬の生首二つ、血に染み、喰合ひてぞ居たりける。之に依つて、御調度懸にありける弓を取り給ひ、山鳥の征矢をつがひ給ふ處に、土屋惣藏、廣縁に立出で、是を見付け、君は如何遊ばされ候や。若し御怪我ありては、悪かりなん。先づ御弓を納め給ふべしと制しけるに、其怪消えて失せたりけるこそ怪しけれ。勝頼は、射留めぬ事を無念に思ひ給ふ所に、高坂彈正昌信、脇を煩ひけるに、病體少しも信玄の様體に替らず、次第に事甲斐なくなりければ、勝頼を

高坂昌信  
病死上杉謙信  
逝去

始め、一門譜代の面々集り給ひ、醫術を盡すと雖も、終に死したりけるこそ、誠に武田家の不祥なれ。爰に上杉人道謙信は、信長へ、使者を以て申されける旨あるにより、當正月より、越後・佐渡・飛騨・越中・能登・加賀・東上野・八箇國の分國に陣觸して、三月十五日、春日山を進發あり。越前に於て、信長を打崩し、天下を掌握せんと宣ひ、用意甚だ嚴重なれば、上杉幕下の諸士、勇み進まずといふ事なし。斯くて謙信は、兼て北條氏政の舍弟を養子とせられ、上杉三郎景虎と名附く。又甥の喜平治をも養ひて、景勝とぞ名乗らせける。然るに謙信進發の用意調ひ、首途あらんとするに、三月九日、雪隠より難病に犯され、醫療術盡きて、同十三日、四十九歳に逝去ある。然るに其翌日、景勝本丸に楯籠り、謙信の御影を懸け、直江山城守已上を召集め、景虎退治の評議せられける。直江山城守の計らひとして、甲州武田勝頼に、北信州を與へ、後詰を頼みければ、勝頼、長篠以來軍を出さざれば、是を快しとして、景勝味方に致しけるにより、景虎終に切腹す。依つて勝頼、甲州に歸陣遊ばされける。然れども高坂彈正死去の事、織田家へも聞え、既に甲州へ馬を入れんとの沙汰とりし

甲陽府館妖孽并高坂彈正死去



なり。爰に情なき事は、高坂相果てゝの後、長坂跡部兩人恣に國政を執行ひけるにより、賢良明哲の義士、甲州を去つて、他國へ赴きける事、甲家の危き事、旦夕にありと思ひける故、進む義士は少く、退く人々多かりける。是唯勝頼の豪奪にして、賢臣の諫を容れず。依つて佞人恣に權を振舞ひ、代々の武田家滅亡近きにある事、誠に淺ましかりし事共なり。

## 織田・徳川・北條國々の諸侯甲州へ進發

斯くて天正十壬午二月十二日、織田信長の嚴命によつて、木曾口は織田中將信忠公、其勢合せて七萬餘人を従へ、甲州へ亂れ入る。又駿河口は徳川家、其勢三萬二千餘人、上州口は北條氏政四萬五千人。飛驒口は金森五郎八三千人。伊奈口は織田信長、其勢十萬二千人、都合軍勢二十六萬二千餘人とぞ聞えける。織田中將信忠公は、同十四日に、岩村に着陣ありけるに、御父信長公の先陣、各伊奈口へ向ふべしとの差圖して、河尻肥前守・瀧川左近將監・毛利河内守・水野監物・同惣兵衛尉差向けらるゝ

織田・徳川・北條國々を攻む

に、松尾の城主小笠原掃部大夫逆心して、はや手合せをぞしたりける。又信忠木曾口先の先陣は、織田源五郎・同赤千代・九津田孫十郎・稻葉彦六郎・塚本小大膳・水野藤治郎・丹羽勘助・築田彦治郎・梶原平治、其勢二萬餘人、鳥居峠を跳越え、桔梗原に陣を取る。斯く四方八方より、大敵雲の如くに起り、鷹の如くに撃つて、襲ひ来る由聞えければ、勝頼、諏訪に御馬を出され、所々の要害に、加勢をぞ籠められける。先づ信州伊奈の高遠の城には、御舍弟仁科薩摩守晴清・小山田備中守羽切九郎次郎・渡邊合太夫・小菅五郎兵衛を差向けらる。深志の城へは、馬場民部少輔・多田治部右衛門を差越さるゝ。駿州鞠子には、諸我兵部・同大輔・朝比奈駿河守・屋代越中守・關甚五郎。同田中の城には、華田下野守をぞ遣されける。然りと雖も、未だ御勢二萬餘人相殘し、諏訪に於て、軍議區々なりと雖も、衆議渾殺として一決せず。武田逍遙軒は、信長の請手として、伊奈郡にまし／＼けるが、諏訪にまします勝頼に、案内もなく軍勢を具して、早々甲府に引退かる。武田左馬之助信豐も、五度の會評に虛病を構へ、兩度ならでは出合はれず。勝頼も、今は忙然とし給ひける體なりければ、足輕大將にて